

日本語・日本事情遠隔教育拠点¹の e ラーニング教材
E-learning Materials by the Center for
Distance Learning of Japanese and Japanese Issues

李在鎬・信岡麻理・古川雅子・今井新悟
筑波大学留学生センター

Jae-Ho Lee, Mari Nobuoka, Masako Furukawa, Shingo Imai
University of Tsukuba

Abstract: 筑波大学留学生センター日本語・日本事情遠隔教育拠点（Center for Distance Learning of Japanese and Japanese Issues）は、平成 22 年度に文部科学省より教育関係共同利用拠点としての認定を受け、1）日本語教材コンテンツの作成およびシステム開発、2）e ラーニング開発のための人材養成、3）ワークショップやシンポジウムなどの啓蒙活動を行なっている。本発表では、1）にフォーカスをあて、日本語・日本事情遠隔教育拠点が取り組んでいる日本語の e ラーニング教材（拠点教材）について紹介する。

キーワード：音声認識システム、SFJ、自立型 e ラーニング

1. はじめに

筑波大学留学生センターは、平成 22 年度に e ラーニングに基づく遠隔教育の支援システムとコンテンツ開発を行うものとして、文部科学大臣による「日本語・日本事情遠隔教育拠点」の認定を受けた（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/03/1291858.htm）。この認定に基づき、日本語教材コンテンツ（以下、拠点教材）を制作するとともに、様々なウェブシステムの開発を行なっている。以下では、日本語教材開発を中心に、その特徴と現在の開発状況を述べる。

2. 基本コンセプト

拠点教材は、高等教育機関に所属する留学生を主たるユーザとして想定しており、プロジェクトが終了する平成 27 年 3 月までに、ゼロ初級～初中級相当の日本語教材を開発する予定である。日本語教材としての基本コンセプトは、以下のとおりである。

- (1) **完全自立コース型**の教材とする。
- (2) 文型や語彙を**積み上げてコース**を設計する。
- (3) **真正性**（Authenticity）を重視し、コミュニケーションの実践に直結する学習内容とする。

¹ プロジェクトの詳細は、<http://www.intersc.tsukuba.ac.jp/~kyoten/> で確認できる。

- (4) マルチメディアコンテンツと**バーチャルな仕掛け**により、学習意欲を高める。
- (5) 大学院生・大学生向けの**アカデミック・ジャパニーズ**としての教材を目指す。
- (6) **直接法**による教材コンテンツを作成する。

以下では、各項目に関する基本的な考え方を述べる。

(1) 完全自立コース型の教材

拠点教材は、日本語学習を希望しているが、専門教育の都合上、日本語の授業に参加できない学習者を対象にしている。そのため、従来、大学機関で作られる e ラーニングの主流である「ブレンディド・ラーニング型」ではなく、e ラーニングの中ですべての学習が完結する完全自立型の教材を作っている。

(2) 文型や語彙の積み上げ方式

学習が継続できるように文型や語彙を積み上げ式でシラバスを設計している。具体的には、場面よりも意味と機能を表現形式で切り出し、レッスンごとに積み上げたあとで場面を設定して、現実をシミュレートするような発展練習まで行う。こうした手法の枠組みとしては、文法積み上げ式とコミュニカティブ・アプローチ (Communicative approach) を統合した概念機能的アプローチ (Notional-Functional approach) の観点から基本設計を行っている (概念機能的アプローチの詳細は Finocchiaro&Brumfit(1983) 参照)。

(3) 真正性、コミュニケーションの実践

現実にあるような場面とその場面で使われる自然な日本語を徹底するとともにフィラーやジェスチャー等のコミュニケーション方略も含む真正 (Authenticity) な会話を積極的に入れている。

(4) マルチメディアとバーチャルな仕掛け

動画などのマルチメディア素材を使うことで、より現実感のある場面を提示し、その場面の中に学習者が入り込むようなバーチャルな仕掛けを提供する。そして、音声認識エンジンなどの最新技術を積極的に取り入れたウェブシステムを使い、仮想空間上で、見て、聞いて、話す日本語クラスを実現する。

(5) アカデミック・ジャパニーズ

大学生や大学院生に相応しい知的な語彙であれば積極的に取り入れるなどして、成人が知的興味を持てる情報や大学生活に役に立つ情報を積極的に盛り込む。

(6) 直接法による教材コンテンツ

従来の日本語ウェブ教材は、翻訳方式のものが主流であるのに対して、拠点教材では、

単語や表現の説明を媒介語で行う方式ではなく、イラストや写真、アニメーションなどのマルチメディア素材を利用し、直接教授法で導入する。

3. 構成

学習コンテンツは Unit で構成される。各 Unit には、5～10 程度のレッスンが組み込まれている。各レッスンには、一つか二つ程度の学習項目（主に文法項目）が設定されており、その文型や表現を習得すれば何ができるのかという視点で、能力記述文(CDS)が設定されている。

各レッスンの構成は表 1 の通りである。

表 1. レッソンの構成

No.	セクション	概要・学習タイプ
1	モデル	学習項目を含んだ独話または対話が映像およびスクリプトで提示される。
2	単語	モデル中の単語や表現が提示される。日本語のほかに選択媒介語（英・中・韓）による翻訳が付く。
3	ポイント	教師のアバターが学習項目を直接教授法で導入する。導入映像の一部再生を含む。
4	練習 1	フォーム・文型の練習である。
5	練習 2	機能の練習である。
6	練習 3	応用練習で会話のシミュレーション・タスクである。
7	確認テスト	学習目標の理解を確認する。得点は学習履歴に登録される。
8	解説 1	学習者向けの学習項目の解説である。選択媒介語（英・中・韓）の翻訳が付く。
9	解説 2	教師向けの学習項目の解説である。

4. システム

日本語・日本事情遠隔教育拠点 e ラーニング教材は、ウェブを通じて配信する。教材システムは、日本語学習 e ラーニング部分と日本語テスト(J-CAT)部分によって構成されており、学習目的に応じてコンテンツが選択できる。

日本語学習 e ラーニング部分は、3 つのサブシステムによって構成されている。1) SNS

(Social Networking Service) システム、2) LMS (Learning Management System) システム、3) RPG (Role Playing Game) システムである。1) は日本語を使ったコミュニケーションを支援することを目的とするものであり、現在、図 1 の SNS が筑波大学の内部で利用可能になっている。2) は日本語教材を配信し、学習履歴などを管理するためのものであるが、システムの骨組みは完成しており、今後、教材コンテンツを登録し、平成 25 年度には配信する予定である。3) はバーチャル空間において、日本語でコミュニケーションを行うことを想定しており、平成 25 年度以降、開発する予定である。



図 1. 拠点教材の SNS システム

5. 今後の予定

平成 24 年度は、筑波大学および一部の大学で、SNS を中心に日本語学習 e ラーニングシステムをテスト公開している。教材コンテンツとしては、ゼロ初級向けの文字学習コンテンツが完成しており、平成 25 年 3 月までに初級前半の教材を完成させる予定である。平成 24 年度中はテスト運用し、利用者からのフィードバックを受け、コンテンツの改良を行った上で、2013 年度には一般公開をする予定である。

【参考文献】

市原明日香, 古川雅子, 石川浩一郎, 飯田将茂, 李在鎬, 今井新悟(2012)「日本語・日本事情 遠隔教育拠点にて企画中の eラーニング教材について」筑波大学留学生センター日本語教育論集 第27号 p.67-80.

Finocchiaro, Mary; Brumfit, Christopher, (1983) *The Functional-Notional Approach: From Theory to Practice*. New York: Oxford University Press.